

意識・節山板倉侯著「白雲山記」

意識 淡路博和

はじめに

節山板倉侯とは、安中藩の第十五代藩主板倉伊予守勝明侯のことです。勝明侯は号を甘雨、または節山と称しました。新島襄先生の言葉を借りれば、「中国の古典に通じ、全国でも有数の学者大名」（「新島襄全集10」三〇頁参照）として知られていました。

その節山侯が、天保七年陰暦三月に、参勤交代で安中に来られた折りに、妙義登山に挑戦し、その登山体験を「白雲山記」として著しました。節山という号も、節くれ立った妙義の山容から付けられた号かもしれません。

同年四月十二日（陽暦五月二六日）弘暁、安中城を騎馬で出発した節山侯は、妙義山の奇岩の数々を巡って、再び安中城に帰られたのは、翌朝の午前五時でした。節山侯の妙義登山への執着の程が忍ばれます。

この「白雲山記」の原文は漢文ですが、神戸藩主の本多愨昇侯 1 が序文で述べておられるように、文中には美しい表現が散りばめられていて、節山侯の漢語に関する知識の深さと語彙の豊かさに、ただただ驚くばかりです。また文中所々に展開される神社や伝承に関する節山侯の見解にも興味が沸きますが、浅学の私には感想の申しようもありません。また、節山侯が、どのようなコースを巡られたのか、確実なコースは私には判りません。文中の岩山の名称から、また記述の情景から、妙義山に詳しい方に、そのコースを確定して頂ければ幸いです。しかし、それにはこの意識が正鵠を得ていなければなりません。この点が心許ないので申し訳ない次第です。

ところで、私が「白雲山記」を知ったのは昭和の末年頃で、当時東京杉並にお住まいの堀口育男氏から送られて来た手書きの「白雲山記」の原文でありました。原本は財団

法人無窮会の静嘉堂文庫にあるとのことでした。堀口氏は後に「群馬文化」二二九号に「白雲山記」の改題と原文を紹介されました。私は今回、無力を省みず意識を試みてみましたが、原文の素晴らしさの万分の一も表すことが出来ません。原文はまことに素晴らしいものですので、この点を強調して、節山侯のお許しを得たいと願っています。その素晴らしさを知って戴きたく、ところどころ〔 〕の中に、節山侯や本多侯の原文を短く挿入致しました。なお()内には訳者が適宜簡単な説明を付記致しました。

* * *

白雲山記に序す (本多忠并侯撰文)

節山板倉侯は、白雲山に登った時のことを文章に致しました。その文を私(本多忠并)に示して、これに序文を書くようにと仰せられました。私はそれを拝読しましたが、美しい〔?々〕言葉が数千言も連なり、高い山や険しい崖〔險?峭壁〕の様子が極めて奇怪に描写されていて、読む人は心が馳せ飛ぶような心地〔神馳心飛〕がして、自らの足でその境地を踏むようであります。嗚呼、節山侯はいかにして、このような優れた文を書けるのでしょうか。

侯は数年前、大坂城を守る大坂加番という役で大坂に出役いたしました。その際に小竹篠翁(大坂の儒者・篠崎小竹)が招かれ経学(四書・五経など儒教の教理を学ぶ学問)を講じました。その時の江戸と大坂との往復の旅行を、侯は紀行文として著したと聞きしましたが、またこのたび妙義登山の遊記を書かれました。大坂加番の時の経験に負うところが多いのでしょうか。私もかつて、侯の大坂加番の際の小竹翁の講義に出席したことを思い出します。ところが私は生まれつき才能に劣り、少しも得るところがなく、今も几々としてなお元のままの私です。侯のこの紀行文を読むにつけても、愧ずかしく且つ羨ましく思わざるを得ません。

そもそも山の険しく厳しい様子〔險峭〕は、大坂への往

路で通った東山道（中山道）の岐嶺（木曾）山中での輿や馬の往来の困難さも、これ（妙義登山の困難）に比べることなどとても出来ません。侯は、鉄の鎖に魚が連なるように続いて登ること〔鎖魚貫〕の労も厭わずに、悩み苦しんで登り降りし〔艱窘登降〕、ことごとく到って遺すところがなかったのです。そして、このような不思議で優れた場所が世に埋もれて、なくなることはないようにと、文章にして顯わしたのです。

節山侯が人材を擢じたり、民の苦痛〔民？〕を心配したりなさることは、小さなことでも大きなことでも遺すことではないのです〔則侯之擢人材問民？、小大無遺〕。必ずこの登山のようにするのではないのでしょうか。このことは人として誰しも望むべきことであります。私が愧ずかしく、また羨ましく思うところは、侯の偉大さは、ただ単に文章のことだけにあるのではなく、物事に対する侯の姿勢にもあるのです。このような訳で、私は序文を認めめた次第です。

天保丁酉（天保八年）冬日。

神戸藤忠升 撰 1

* * *

白雲山記

（節山板倉勝明侯著）

丙申（天保七年）の暮春（陰曆三月）、私（節山侯）は江戸より安中城に遷りました。城の四遠（四方遠く）はみな山です。私は酒を書堂（書齋）で把り、頭を挙げて一望すると、浅岳（浅間山）は雪を帯び天に聳え、その巔には煙が蒸り、土地の者は常にこの煙を觀て晴雨を占っています。東にたなびけば晴、西にたなびけば雨であると。その他に白雲・金鷄・金洞の諸峯は秀を競い、その形は筆架（筆掛け）のようです。日に日は白雲山に隠れましたが、その餘暉（余光）はなお峯に残っています。先考（亡父・板倉勝尚侯）はいつも白雲山を愛しんでいましたので、その名を採って号（号「綽山」）となし、詩文もあります（書名「綽山吟草」）。私もまたこの山のことを夢にまで見て

いましたので、その不思議さを探りたいと欲していました。そこで、江戸滞在中に官（幕府）に願って登山の允^{ゆるし}を得たのです。

四月十二日（陽暦五月二六日）、拂^{ひぎ}曉^{きょう}（夜の明け方）、馬に鞭^{むち}を当てて松井田駅（松井田宿）に至りました。先ず、その鞆^{たもと}を郵亭^{ゆうてい}（金井本陣 2）に於いて瞻^あぎました。すると山腹^{やまはら}に咬^{くは}い一隻の若い鷺^{さぎ}の姿が見えました。聞いてみますと、それは数千の幣^{へい}を聚^あめて、それでひとつの「大」の字の形を作ったもので、三丈ばかりの大きさだそうです。紙を裁^きって片^し頭^{とう}（木を二つに割って右を片、左を片^し）という。片^{へい}は矛^{ほこ}の意）に挿^さして、それを神主とし、俗にこれを幣^{へい}といいます。

宿場^{しゆくば}より左に曲がって橋を渡りました。中瀬橋^{なかせばし}と言います。碓氷川の澄んだ清湍^{せいたん}（早瀬）に、蛙の鳴く声と水の流れる音が互いに相和^{あいわ}し[龜吠水韻相和]、畑の麦が青々と茂^りり[籬^{りょうはく} 麦^{ぼうぼう}? 々]、天^{てん}?（雲雀）が空高く鳴いています。行くこと十許里（十里ばかり・約五^き里^り）、そして坂を上り黒門を潜^{くぐ}ります。門を入ると客店（旅館）が数十軒あります。香火が盛んな時は、さぞかし賑やかなことと思われれます。

石階^{いしかい}（石段）を登り、二王門を過ぎると、右は殿閣^{てんかく}（御殿）です。石階（石段）を凡そ三層攀^あがると、妙義権現の祠^{やしろ}があります。それでこの山を妙義山ともいうのです。小^{しょう}窓閑語^{そうかんご} 3 に「花山院内府光秀は、この山に乱を避け、後に妙喜^{みょうき}と号した。当時その才学^{さいがく}を統^とえられ、法^{ほう}性^{しょう}房尊意^{ぼうそんい}とも比べられ、卒してここに祠を建てた。現在は誤って尊意の霊^{たま}を祀るといわれている」と。私は光秀という人がいつの時代の人であるかを知らないし、また何の乱かも知りません。南朝の花山院右大將^{かざかいん}長頼^{ながたか} 4 はもともと文学^{たしな}を嗜^{たしな}み、後に雑髪^{ていばつ}して明魏^{みやうゑい}と号しました。その亡くなったところは詳^{つまび}らかではありませんが、世間では野州（栃木県）に^{ちんりん}淪^{りん}して（落ちぶれて）終ったとも伝えられています。それですから、この説が果たして本当か

どうかわかりませんが、今では妙義と称しています。おそらく音読みが同じなので誤ったのでありましょう。

右に波舌曾神の祠があります。延喜式に載っている白雲山の祠がこれです。しかし今は衰えて、妙義権現の祠だけが盛んです。これは田氏が整えて（管理して）いるからでしょう。その傍に小さい祠が数多あります。階を数十段降りると、護摩堂・千手観音堂があります。

左に折れて坂を降り、吉沢亭に憩いました。茂った竹が亭をめぐり、幽遠な雰囲気[幽竹娟々]を醸し出しています。酒を傾けること数杯、次に金洞山に上りました。俗には中嶽と号します。おそらく白雲山の中央の嶽だからでありましょう。十里余りの間には、群峯の巖が層[層崑]をなして、坂道が険峻で羊の腸のように屈曲しています[屈曲羊腸]。そのうえ路は窄く人は並んでは歩けません。細い泉が幾筋も競って流れ、その音は美しい玉を鳴らすようです。溪の橋をわたると、遙かに嵌空(空洞)が見え、その形は半月に似ています。

諸戸村を通過いたしました。この村は小幡侯(時の小幡藩主松平忠恵・二万石、群馬県甘楽町)の領地です。私のために路を掃除してくださり、ひとつの小さな亭が設けてありました。ここでひと休みし、鳥居下に到着しました。古に中嶽の華表(鳥居)をここに立てたので、それが地名(鳥居下)になったとのこと。我が邦の神の祠にはみな華表が置いてあり、俗にこれを鳥居と言います。

遙かに東南を望むと、山の峯々が波濤のように互いに連なって[聯互]います。松井田駅が目下に見えます。四方を瞻わたすと、まず荒舟山が見えます。その形はあたかも風と組み討ち[搏風]しているように見えますので、ひとつには搏風山と称し、ひとつには長棟とも称して、上毛と信濃の界になっています。私は先の呼称は誤りではないかと思えます。

さて、歩みを進めて崑高寺に到り、日本武尊の祠を拝し、天黒天の祠に詣で、僧長清の墓に及びました。西に険

しい巖^{いわ}が数十^{じゆ}仞（一切は八尺）も高く聳^{そび}え、まるで雲を^{すず}り霧を^は噴くようで[?雲噴霧]、あたかも半天（中天）に懸かるように見えます。巔^{いただき}に天狗の祠^{てんぐほくら}があります。我が邦で言ういわゆる天狗^{てんぐ}は、彼の中（中国）でいう神仙^{しんげん}（仙人）のようなものです。ただ、その形の図は多くは鳥獸異物に似ています。物茂卿^{もぎゅうそうらい}（^{教生祖徠} 5）が言われるには、「天地万物には易^{えき}（変化）があり、良^{りやう}は山となり、そして狗となり、黔喙^{へんたう}（黒いキツツキ）の一種になった」と。天狗などは、それを^{ようしやう}象（その形に従う）したものではないでしょうか。

また石橋を渡ります。これは三峽橋と言います。ちょうど穹^{きゆう}窿^{りゆう}の懸磴^{けんとう}（天空に懸かった弓のような形の石橋）のようで、恐らく人功（人の業）の及ぶところではありません。下に方丈^{ばんじやう}の壑^{たふ}を臨^{のぞ}めば、香冥^{きやうめい}（奥深くて暗い様子）は際^{まわ}まりがありません。ただ喬木^{きやうぼく}の巔^{いただき}を瞰^{みおろ}すのみです。髟^{ひげすり}拮^{けつ}と呼ばれる窟^{いく}があり、隙間^{すきま}は身を容^{いれ}るのがやっとです。それでこのような名が付いたのでしょう。登ってみると、上は十余人が坐れるくらいで、壁は萬仞^{ばんにん}、削^{けず}られたように立っています。四方を見渡せば、口を開いたような様^{がざん}[呀然]をした谷ばかりです。沓^{くさ}くて来た道を見失ってしまいそうです。

仰げば更にひとつの石の峯があり、階級（階段）はなくなっています。上に小さな祠が置いてありますが、登る者は梯^{はしご}を釣^つって攀^よじ登ります。また葛籠^{くわろう}崑^{くわん}・蠟燭^{ろうそく}岩^{いふ}・大黒岩^{だいこく}・霄^{せう}岩^{いふ}・螺^ら崑^{くわん}があり、巍然^{ゑぜん}（山高く険しい様）として竝峙^{へいじ}（並んで峙^{そばた}つ様）しています。その他に、小さな岩はちょうど龍孫^{りゆうそん}（^{たけのこ} 荀^{じゆん}）が竹祖^{ちくそ}（親竹）に待^{まち}るように沢山^{はく}あって、指^{ゆび}を屈^{かむ}するに暇^{いとま}もありません。大日崑^{たいにち}・釋迦^{しやくか}嶽^{たけ}・仙人^{せんにん}嶽^{たけ}・弥陀^{みだ}嶽^{たけ}などが、重なり合ったり左右に並んで[重^{ちゆう}疊^{じゆう}左右]立っています。旱魃^{かんぱつ}や淫雨^{いんう}（長雨）の時は皆この山で祈ります。晴を祈る時は大日嶽^{たいにちたけ}、雨を祈る時は三つの嶽の松の枝を折り、それを持ってその地を環^{めぐ}ります。果たして環^{めぐ}るほどに靈雨^{れいう}（良い雨）が注^{そそ}ぐのです。土地の者はこの処を

西の奥院と言い、静かな夜には天の楽の音が聞こえるとい
います。

また崑高寺に遷りました。私はかつて、東の奥院には石
門が四つあり、その三・四の門については皆聞き伝えに知
り、登って観る者は少ないと聞きましたので、このことを
住僧に聞いてみました。すると僧は「僕 従（従者）が多い
と險路は不便です」と言いました。そこで導者（道案内の
者）を呼び、扈従（供の者）を偕いて行きました。果して
路は險危です。蔓草（つるくさ）は毎々（しばしば）路を覆
って人の通った跡はないようです。仰ぐとそこに第一門（第
一石門）があり、全ての石は天然の造形で人の手は全く假り
ておりません。竦立つこと数千仞もあります。愕然として
目を（駭くの誤）かせます。高くて大きいのですが、人
が身を屈めて敬って[鞠躬]も容れてくれないような威
厳があります。また草を分けて行くと、路は頗る険しく、
或いは高く或いは低く、或いは曲り或いは真っ直ぐで、ほ
の暗い霧が深く広がり[幽霧冥漠]、深淵で広大な様
[邃如曠如]を呈しています。

行くこと数千歩、遙かに山間を望むと門の形の岩があり、
これが第二門（第二石門）です。畏れかしくみて、とても攀
じ登ることなど出来る筈もありません。左は辨天窟です。
草木が鬱り山の形も他と異なっています。そこで環って進
みました。路は愈 険しく、壑は愈 幽いのです。沙石（砂
と石）は徑に満ち、入り交じって落ち[錯落]ていて、あ
たかも碁子（碁石）を散らしたようです。足が触れると散
らばり、そのために脚を失い、墜ちそうになったことも
しばしばでした。蘿をきよせ葛を捫り、猿懸け（肩車のような
様子）をして進みます。山蛭が点々と木の梢から落ちて
きます。徑は窮まり、懸崖は百余丈もあり、下ることも出
来ません。帯をもって互いに体を連結し、縄をかけて下り
ました。ところが溪があり路をきぎっています。左を顧み
ると、ひとつの穴がた窟に向かって開いています。その中に
入りますと、維摩室より広いのです。これを第三門（第三

石門)と言います。石門を出ると緑の木々が交差して、日光は^勢に照る程度です。水を渡り石を履[度水履石]んで、第四門(第四石門)に到り、その^傍に憩いました。一面に広がる遠くの山々は^聳なり合い[聳雲]、その中に^一際高い[?然]山があり、一羽の野鶴が^鷄の群れの中に立っているように見えるのが^縮含山です。三面の^巨崑は林のように立ち、^鋸を^削ぎ刀を削るように見えます。第一と第二の石門がまた目下に見えます。おおよそ人の伝える説は、みな名はその^実際より^浮いものです。ただこの第四門は、聞^くところより^愈っています。^往者 私は東海道と中山道を^へ経めぐり、^寝覚の^崑屋・^塩尻・^清見・^薩?の景勝地を^観て来^ました。そして私もこれは天下にまたと無^き奇^しき景^観と^言って^きま^したが、今^眼前に^して^いる^ような偉^大な景^観があ^った^とは^思い^もよ^らない^こと^でし^た。ま^さに^私の^領内^のこ^とな^のに、「^いわ^{ゆる}自^目 ^瞳(^眼と^瞳)を^失う^者」[^所謂^失之^目 ^瞳者^非耶])^にな^らない^か。こ^のこ^とに^気づ^き、^私は^思わ^ず苦^笑して^しま^いま^した。

寺よりここに至ること十有余里、路は^険しく^すっ^かり?^ひあ^しは^移り、^従う^者も^皆喉^が ^濁きましたので、^此処^で ^瓢を^傾け^とも^に飲^みま^した。^勞れば^やはり^勞って^やる^こと^が大^切です。それは世^渡りの^艱難^で苦^勞が多い^こと^では^なく、こ^のよ^うな^役向^きの^辛苦^を与^えた^から^です。一^生名^山に入^って^遊ぶ^こと^を好^んだ^酒仙^の翁^(唐の詩人李白)は、^私を^欺く^でしょう^か、決^{して}欺^かない^でしょう。(たとえ^疲れても^山中^を ^跋渉^{する}のは^格別^の楽^しみ^である^との^意)。

また前方^のもの^を問^えば、これは^話小^屋だ^と言^う。な^お前^に進^もう^と欲^しま^した^が、日^は既^に十二^時を^過ぎ^ました^ので、第一^門(第一^石門)に^還り^ました。路^はや^や平^坦で、^崑の?^に水^が一^泓(^ちよ^っと^した^深さ)溜^まっ^てお^り、そ^れは^日照^り続^きでも^濁れた^こと^がない^ので、俗^名を「^菅公^の硯^水」(^菅原^道真^の硯^水)^と言^って^いる^と聞^きま^した。あ^たか^も尊^意を^菅公^の師^とし^たよ^うに、こ^れも^根拠^のない^説[^妄説]^とす^るの^みで^す。

吉沢亭に遷りました。午飯を食べるとまた勇気が湧いてきたようです。そこで今度は白雲山に登りました。溪の水は道の傍に注ぎ、その琮々(玉が互いに当たる音)する音はあたかも琴筑(琴や筑)の音のようです。積りに石は徑に横たわり、これを犬炭石と呼びます。ここからは犬も登ることが出来ないと言います。試しに登ってみると高い岩(岩)が相対し、その間は僅かに人を通すのみです。

そこを遡って山復(山腹)を行きますと、谷の水[瀾水]は極めて清く、手で掬って飲んで渴きを医し、また?(甑を重ねたような岩)に登りました。丟天尺五(天空との距離が極めて近い)、奇岩が突起して卓越した筆[草筆]のようで、名付けて天狗の御所と言います。深い池があり水は清く、行くこと数歩、また洞窟がありました。すぐに入って階段を通過して登りました。中にひとつの窟(室)が置いてある窟があり、これは窟の中の窟であります。その窟の口に鉄の鍵があり、これを援けにして攀じ登ると、そこには十一面観音の石像がありました。窟の中は滴がぼたんぼたと落ちて[滴瀝點々]、深く窪んだ処には水が溜まっていた[泓而瀦焉]。ここを妙義の奥院としています。凡そ名山には神祠や佛堂を置き、必ずその奥の隅[奥陬]には別に祠堂を設けて、これを奥院と言っています。いわば離宮や別館のようなものです。案内者が「奥深く入ってはいけません。深く入ると滴が雨のように降っていますから」[不可深入、深入則滴瀝如雨]と言いましたので、入るのは止めました。

登り初めはまだ日が高かったので、ともしびを灯す配慮[慮燭]には及ばなかったのですが、暗い雲が俄に広がり[陰雲俄布]、帰途は暗い中を数千歩も降りました。大の字の幣の下に至ると、已に日は暮れていました。雨が甚だしく降りそそぎ、物の色を見分けることも出来ません[雨霏々不辨物色]。崖のために路に窮してしまいました。そこでまた猿のように連なって降りました[猿貫而降焉]。

突然、樹々の間に光の閃くのが見えました。家臣が燈

(提^ち灯^{とう})を提^ひげて迎えに来たのです。天狗堂^{てんこうだう}に憩^ひい、殿閣^{てんかく}(御殿)を過ぎて古器物を觀賞いたしました。そして、松井田駅(松井田宿)より馬を馳^はせて城に入りましたが、時は巳^ひに五更^{ごこう}(午前五時頃)になっておりました。

(意識了)

(注釈)

1 神^{かん}戸^べ藤^た忠^だ升^{ます}撰

この序文は、伊勢国神^{かん}戸^べ藩(現三重県鈴鹿市)一万五千石の藩主本^{ほん}多^だ忠^だ升^{ます}の撰文です。

2 郵亭

松井田宿には横町を挟んで、東西に本陣があり、この場合は東の金井本陣と思われる。それは、「宿を出てすぐ左(南横町)に曲がった」と記されていることから判断できます。

3 小^{しょう}窓^{そう}蘭^{らん}語

鈴木忠侯著 寛政二年(一七九〇)刊行

4 花^か山^{ざい}院^{いん}右^{みぎ}大^{だい}將^{しやう}長^{なが}親^{ちか}

室町時代の代表的歌人、明魏と号し、五十音・伊呂波研究の先覚者です。

5 物^{もの}茂^も卿^{けい}

荻^{あし}生^{せい}祖^そ徠^{らい}の^{こと}です。荻^{あし}生^{せい}家^けは物^{もの}部^べ守^{もり}屋^やの^ため^に、^物部^べを^し氏^しとし^て荻^{あし}生^{せい}を^し姓^{せい}と^しま^した^ので^す。
未^み裔^{がい}名^なを^し氏^し卿^{けい}と^いい、^それ^で物^{もの}茂^も卿^{けい}と^称した^のこと^です。

付図 「白雲山記」には左記四枚の絵が付いています。

堀口育男氏論「板倉節山『白雲山記』に就いて」
(「群馬文化」二二九号)より引用。

